

平成 27 年度 全国私立中学高等学校
私立学校特別研修会
外国語（英語）教育改革特別部会
〔南日本エリア〕
実施報告

主催 一般財団法人私学研修福祉会 協力 一般財団法人日本私学教育研究所
 後援 日本私立中学高等学校連合会

小学校・中学校・高等学校等を通じた英語教育改革を進める文部科学省では、平成 26 年度より英語教員の英語力・指導力強化を図る観点から、英語指導力向上事業「英語教育推進リーダー中央研修」を外部専門機関に委託し実施しています。同研修は、全国の国・公・私立学校の英語教員を対象にしていますが、公立学校を中心とした研修の仕組みになっていることから、私立学校教員は参加しにくい状況になっています。

また、国が進める英語教育改革に係る最新の情報も、私立学校には十分に伝わっていないのが実情で、私立学校教員は公立学校教員に比べその情報量が少ない故に埒外に置かれた状況となっています。

ついては、私立学校においても、外国語（英語）教員の外国語（英語）力・指導力強化を図るためには、教員が 21 世紀型教育に相応しい最新の教授法等を取り入れる必要があることから、平成 27 年度より専門家の指導による研修を実施することとしました。

- ◆ **会 期** ◆ 平成 27 年 6 月 26 日（金）～27 日（土）
- ◆ **会 場** ◆ 上智福岡中学高等学校（26 日）
 福岡県福岡市中央区輝国 1-10-10（地下鉄七隈線桜坂駅徒歩 9 分）
 福岡ガーデンパレス 3 階「宝満」（27 日）
 福岡県福岡市中央区天神 4-8-15（地下鉄空港線天神駅徒歩 5 分）

- ◆ **参加者数** ◆ 33 名（募集 40 名・1 校 1 名）
- ◆ **参加対象** ◆ 私立中学高等学校の英語科教諭（ワークショップは英語で行われます）

◆ **プログラム** ◆

- ① 研究授業 上智福岡中学高等学校（中学 1 年～高校 2 年の英語の授業視察）
- ② 実践発表及び意見交換
 上智福岡中学高等学校における新たな英語教育の実践を紹介します
 ◇実践発表 テーマ 新たな英語教育への道のり
 発表者 船橋 巖 上智福岡中学高等学校教頭
- ③ 講演 演 題 21 世紀型の英語教育を目指して
 講 師 吉田研作 上智大学特任教授・言語教育研究センター長
- ④ ワークショップ
 新しい英語教育にどう対応するか ～CLIL、4 技能の英語力育成～
 上智大学が実践する英語授業の手法を、吉田研作氏の指導助言も交えながら体験します。
 ・講師 藤田 保 上智大学言語教育研究センター教授
 ・講師 逸見シャントール 上智大学言語教育研究センター准教授

◆ **日程概要** ◆

時刻	09 30	10 00	11 00	12 00	13 30	14 00	15 00	16 45	17 00
6 月 26 日(金) 〔上智福岡〕				受付	開 会 式	① 研究授業		② 実践発表・意見交換	
6 月 27 日(土) 〔福岡 GP〕		③講演	情報交換会 ～昼食		④ワークショップ		閉 会 式		

◆ 学校紹介 ◆

上智福岡中学高等学校

理事長 増井 啓 校長 大石 英雄

上智福岡中学高等学校は、カトリック男子修道会であるイエズス会を経営母体とする完全中高一貫教育校です。1学年4クラス、生徒数は835人で、福岡市の中心に立地ながらも、緑豊かな丘の上という恵まれた環境で生徒たちはのびのびと学校生活を送っております。昭和7年の創立以来平成23年度まで男子校でしたが、平成24年度より女子生徒の募集を開始し、今現在高校1年まで共学となっております。

「Magis—さらに、よりよく」「Men and Women for Others, with Others—他者に奉仕する」「Excellence—卓越性を求める」を校訓に、アジアの玄関口と言われる福岡の地において、グローバルコンピテンシーを備えた、他者のために生きる優秀なリーダーの育成をめざした教育をおこなっています。経営母体を同じくする上智大学との緊密な教育提携を軸に、平成23年度よりグローバル化の時代にふさわしい学校へと教育改革に取り組んでおります。

平成27年度SGH（スーパーグローバルハイスクール）アソシエイトに文部科学省より指定されました。深い教養と他を思いやる心、思考力・判断力・表現力を持ち、自ら考え、多様な価値観や世界観を持つ他者と協働しながら、未来を切り開くことのできるグローバル・リーダーの育成にいっそう力を入れております。

◆ 講師プロフィール ◆

吉田研作氏

1948年生まれ。上智大学特任教授、言語教育研究センター長。上智大学大学院、アメリカ・ミシガン大学大学院修了。専門は、応用言語学。J-SHINE会長。文部科学省「英語教育の在り方に関する有識者会議」座長、「外国語能力の向上に関する検討会」座長、「外国語教育における『CAN-DOリスト』の形での学習到達目標・設定に関する検討会議」座長、「英語力評価及び入学選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する連絡協議会」委員、「同協議会作業部会」主査などを歴任。今年からは「高大接続システム改革会議」委員、中央教育審議会「教育課程企画特別部会」委員などを務めている。近年では、日中韓3カ国の高校生の英語力比較や、教師の教授法比較などについての研究にも力を入れている。「起きてから寝るまで英語表現700」シリーズや「小学校英語指導プラン完全ガイド」（ともにアルク）などの監修を務めるほか、著書多数。

藤田 保氏

上智大学外国語学部比較文化学科（現、国際教養学部）卒業。同大学院外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了。専門は応用言語学（バイリンガリズム）と外国語教育。立教大学異文化コミュニケーション学部教授等を経て、現在、上智大学言語教育研究センター教授、副センター長。特定非営利活動法人小学校英語指導者認定協議会（J-SHINE）理事。主な著書に『コミュニケーション型英語教育を考える』、『英語教師のためのワークブック』（ともにアルク）、『21年度から取り組む小学校英語』（教育開発研究所）などがある。

逸見シャントール氏

上智大学言語教育研究センター准教授。エクセター大学より2003年に教育学博士（EdD TEFL）を取得。プリティッシュ・カウンスルにて、主に英国人講師のための実践的な研修、ならびに小学校外国語活動導入のための研修に携わる。2013年より上智大学のEAP/CLILのコースのカリキュラムデザイン、及びPD（Professional Development）の企画、運営を担当。2015年より現職。研究分野はバイリンガルのアイデンティティとCLILの原理と実践。

◆ 講師・発表者・指導員（順不同） ◆

吉田 研作	上智大学特任教授・言語教育研究センター長
藤田 保	上智大学言語教育研究センター教授
逸見 シャントール	上智大学言語教育研究センター准教授
船橋 巖	上智福岡中学高等学校教頭
吉田 晋	富士見丘中学高等学校理事長・校長
中川 武夫	蒲田女子高等学校顧問

◆ 特別委員・指導員（順不同） ◆

平方 邦行	工学院大学附属中学高等学校校長
堀内 成子	札幌聖心女子学院中学高等学校教諭
藤戸 政綱	聖徳学園中学高等学校教諭
反田 任	同志社中学高等学校教諭
船橋 巖	上智福岡中学高等学校教頭
川本 芳久	一般財団法人日本私学教育研究所事務局長代行
山崎 吉朗	一般財団法人日本私学教育研究所主任研究員

授業実践者（上智福岡中学高等学校）

- | | | |
|-----------------------|----------------------|--------------|
| ①中1英語：松井 綾子 | ②中1E語：馬郡 敏美／パスカル・ボルツ | |
| ③中2英語：村上 勤 | ④中3英語：志岐 美佳 | ⑤高1英語：坂井 奈保子 |
| ⑥高1E語：藤木 克哉／ニール・ウィトキン | ⑦高2英語：福田 直之 | |

◆ 日程表 ◆

6月26日(金)

〔会場 上智福岡中学高等学校〕

12:00	
12:30	受付〔中央棟1階ホール〕
	◇ 開会式 〔中央棟3階会議室2〕 司会 川本芳久 (一財)日本私学教育研究所 事務局長代行 1. 開会の辞 2. 開会挨拶 (一財)日本私学教育研究所 理事長 吉田 晋 3. 視察校代表挨拶 学校法人泰星学園 理事長 増井 啓 4. 関係者・特別委員紹介 5. 研修会方針説明 (一財)日本私学教育研究所 外国語(英語)教育改革特別委員長 平方邦行 6. 研究授業等説明 上智福岡中学高等学校 教頭 船橋 巖 7. 閉式の辞
13:00	◇ 研究授業 中学1年～高校2年の英語の研究授業を視察します ※写真撮影については、学校の指示に従ってください。 13:10-13:55 ①中1英語 ②中1E語 ③中2英語 ④中3英語 14:05-14:50 ⑤高1英語 ⑥高1E語 ⑦高2英語
15:00	◇ 実践発表 〔会議室2〕 司会及び発表者紹介 外国語(英語)教育改革特別委員 堀内成子 英語教育改革への取組と実践について紹介します テーマ 「新たな英語教育への道のり」 発表者 上智福岡中学高等学校 教頭 船橋 巖
15:30	◇ 質疑応答・意見交換・助言 〔会議室2〕 司会 山崎吉朗 (一財)日本私学教育研究所 主任研究員 研究授業・実践発表を受けて質疑応答の後、参加者は小グループでの意見交換を行います 指導助言 上智福岡中学高等学校 教頭 船橋 巖 上智福岡中学高等学校 授業実践者 上智大学特任教授・言語教育研究センター長 吉田研作 15:30-16:00 質疑応答(研究授業・実践発表) 16:00-17:00 意見交換〔会議室1、会議室2、選択教室1、選択教室2〕 ◇進行役 A堀内成子 B藤戸政綱 C反田任 (以上、外国語(英語)教育改革特別委員) D山崎吉朗(主任研究員)
17:00	

6月27日(土)

〔会場 福岡ガーデンパレス 3階「宝満」、情報交換会・昼食 1階「ガーデンホール」〕

09:30	◇ 講演 〔3階「宝満」〕 司会及び講師紹介 外国語(英語)教育改革特別委員 船橋 巖 演題 「21世紀型の英語教育を目指して」 講師 上智大学 特任教授・言語教育研究センター長 吉田研作
11:00	◇ 情報交換会～昼食 〔1階「ガーデンホール」〕 参加者による情報交換の場を設け、昼食をとりながら交流を深めます。 初日のグループとは異なる新たな仲間とのネットワークづくりにお役立て下さい
12:30	◇ ワークショップ (英語で行われます) 〔3階「宝満」〕 司会及び講師紹介 外国語(英語)教育改革特別委員 藤戸政綱 新しい英語教育にどう対応するか ～CLIL、4技能の英語力育成～ 講師 上智大学 言語教育研究センター教授 藤田 保 講師 上智大学 言語教育研究センター准教授 逸見シャントール (指導助言 上智大学 特任教授・言語教育研究センター長 吉田研作)
15:45	◇ 閉会式 〔3階「宝満」〕 司会 川本芳久 1. 閉会の辞 2. 総括 (一財)日本私学教育研究所 主任研究員 山崎吉朗 3. 閉会挨拶 (一財)日本私学教育研究所 所長 中川武夫 4. 閉会の辞
16:00	解散

私立学校特別研修会 外国語(英語)教育改革特別部会【南日本エリア】実施報告

平成 27 年度の新規・重要事業の一つとして新たに設置された外国語(英語)教育改革特別部会(以下、「特別部会」)は、国が進める英語教育改革、大学入試制度改革の動きに対応していくため、英語教員の英語(外国語)力・指導力の強化、及び 21 世紀型の英語教育にふさわしい最新の教授法を積極的に取り入れることを目的とした、専門家の指導による実践的な教授法に係る研修会である。また、文部科学省による「英語教育推進リーダー中央研修」の研修実習の受け皿としての役割を併せ持つ。

本年度は全国 5 つのエリアで開催する。会期は 2 日を基本とし、英語教育において先進的な取り組みを行う学校の英語授業視察並びに専門家による講演・ワークショップ等を研修会の柱として実施する。

当特別部会【南日本エリア】は、6 月 26 日(金)・27 日(土)、福岡市・上智福岡中学高等学校及び福岡ガーデンパレスを会場に、募集人員 40 名に対して英語科教員等 33 名の参加を得て実施した。

《開会式》

上智福岡中学高等学校で行われた開会式では、当研究所・吉田晋理事長(富士見丘中学高等学校理事長・校長)による開会挨拶、増井啓・学校法人泰星学園理事長による視察校代表挨拶の後、関係者・特別委員の紹介があり、平方邦行・外国語(英語)教育改革特別委員長(工学院大学附属中学高等学校校長)による研修会方針説明、船橋巖氏(上智福岡中学高等学校教頭)による研究授業等の説明が行われた。この中で吉田理事長、平方特別委員長は共に、私立学校は国が進める英語教育改革への対応が公立に比して難しい状況下にあっても遅れをとってはならない、そのためにも当研究所はより多くの研修会を提供していくと述べ、私立学校全体でこの変革期を乗り切っていく必要性を訴えた。



吉田晋 理事長



増井啓 泰星学園理事長



平方邦行 特別委員長



船橋巖 上智福岡中高校教頭

《研究授業視察》

上智福岡中学高等学校の中学 1 年から高校 2 年までの英語の授業 7 クラスを参加者は自由に視察して回った。思い切った英語教育改革に英語科教諭一丸となって取り組む同校の授業は、ほぼ英語で行われ、ペアワーク、グループワーク、生徒主導と様々であったが、どの授業にも躍動感があり、また、英語で表現しようとする意欲あふれる生徒の姿が印象的であった。



研究授業視察風景

《実践発表》

特別委員を務める船橋巖氏が、「新たな英語教育への道のり」をテーマに実践発表を行った。同校は 2010 年度より上智大学と教育提携しており、定期的に吉田研作氏(上智大学特任教授・言語教育研究センター長)の指導助言を受けながら英語教育改革を進めている。船橋氏は発表の中で、従来型の英語教授法では「話せない」「使えない」という状況に英語教育に対する挫折感を味わい、また生徒募集への危機感から改革に取り組んだこと、学年毎に「使える英語」の目標レベルを決めて、英語科全員が「アウトプット活動」「4 技能型授業」を目指して授業づくりに臨んだ結果として、GTEC、英検、進研模試等で得点の向上が見られたことなどを教育改革報告書のデータを提示し紹介した。また、チームワークと適切な助言者の存在が苦しい道のりを乗り越える力になっていると述べ、今後も検定教科書をベースにアウトプット活動を重視した 4 技能型授業、Can-do リストに基づく授業を目指していくと述べた。



船橋氏をはじめ、同校が英語の指導教材や教授法の指導を受けている吉田研作氏(上智大学特任教授・言語教育研究センター長)、授業実践者9名に対する質疑応答のあと、4グループに分かれての意見交換会に移った。堀内成子氏(札幌聖心女子学院中学高等学校教諭)、藤戸政綱氏(聖徳学園中学高等学校教諭)、反田任氏(同志社中学高等学校教諭)ら特別委員と山崎吉朗・当研究所主任研究員が各グループの進行役となり、吉田氏、授業実践者も各グループに加わり、研究授業内容に関する質疑応答や参加者各校の現状・課題報告など、活発な意見交換が行われ、1日目の研修は終了した。



《講演》

2日目は、会場を福岡ガーデンパレスに移し、午前は、文部科学省有識者会議・中央教育審議会で数々の座長・委員を務め、英語教育改革の先導的な役割を担われている吉田研作氏が「21世紀型の英語教育を目指して」と題して、最新の改革状況、日本の英語教育の課題と今後の方向性等について解説した。



英語教育改革の必要性が高まる中で、グローバル化に対応した英語教育改革実施計画が策定された。小学校高学年から教科型英語授業が導入されることで、必然的に内容が前倒しされ、学力的に取り残される生徒の数の増加が懸念される。国が目指す高校卒業時の英語力の目標に現状では達しておらず、全体の底上げが必要である。英語力向上のために大学入試改革は不可欠であり、2020年度より移行する新型入試で英語は4技能を全て入れることになる。世界的に見て日本人の学習到達度は高いのに英語力のみが低いのは、外国語に対する自信のな

さという内向きな日本人の特性が大きな要因となっている。そこで、個人の中に個人の必要性に合った言語が存在する Plurilingual を目標に、「国際共通語としての英語」を使えるようにする。ネイティブのような発音ではなく、アイデンティティーを持った日本人として、日本人の英語で言いたいことをきちんと相手に伝わるようにすること、コミュニケーションが大切である。4技能を伸ばすためには Can-do を活用して目標を目に見える形にすることで到達できるようにすることが有効で、生徒にとって受け身の授業(Low Order Thinking Skills)よりも主体性をもった授業(High Order Thinking Skills)が効果的である。他教科と統合した内容を織り込む手法(CLIL)もある。更に言えば、英語以外の外国語指導の充実が必要である。教員は英語以外に副専攻を持つべきで、例えば社会などの教科を英語で教える能力が求められてくる。

《情報交換会》



講演後、参加者は4グループに分かれての情報交換会を、初日のグループとは異なるメンバーで行った。各グループの進行役は、堀内氏、藤戸氏、反田氏、船橋氏の各特別委員が務め、参加者は名刺を交わし、昼食を摂りながら活発な情報交換を行い、明日につながるネットワークづくりの場となった。

《ワークショップ》



午後のプログラムは、逸見シャンタル氏(上智大学言語教育研究センター准教授)によるワークショップで始まった。冒頭から参加者同士がペアになって英語でのコミュニケーションによって、場の雰囲気が一気に活動的になった。その後も多様なグループ分けを行いながら CLIL(内容言語統合型学習)の内容説明も織り交ぜて、教科書教材を基にした CLIL 授業を参加者が生徒となる形で体験した。90 分間指示も発言も含めてすべて英語で行われたが、参加者が十分に理解し表現できる英語力があることに、意欲とレベルの高さが感じられた。4 グループに分けて、それぞれ「ホームレス支援のための提案のプレゼンテーション」を作成する課題を与えて終了した。



休憩をはさんで、講師は藤田保氏(上智大学言語教育研究センター教授)へと引き継がれ、「CLT における評価の考え方と方法」をテーマに、4 技能評価の方法を紹介した。筆記試験だけでは測れないパフォーマンスの部分はどう評価に表すのか、その方法としてルーブリックを説明し、観点が異なると評価が変わる事例等を紹介した。その後、グループ毎に「生徒のプレゼンテーション評価のためのルーブリックを作成し、先ほどの逸見氏の課題で完成させた他のグループのプレゼンテーションを評価する」というワークショップを行った。全体的にルーブリック作成がなかなか難しいようで、観点等を決めかねている様子であったが、ここでもすべて英語で行われた内容は各参加者が理解して、さらに意見交換会・情報交換会を経て打ち解けた雰囲気で協力しながらグループワークに取り組んでいた。

《閉会式》



山崎主任研究員は、当特別部会の研修の趣旨、並びに今後の実施計画、特別部会開催に至る経緯等について説明し、6月13日に開催した【東京エリア】に続くこの福岡での当部会が本来の基本形による第一弾の研修であることなどを伝え、参加者には当研修会で得た知識と体験を各学校に持ち帰り、参加者同士のネットワークを活用して、私立学校の英語教育改革に役立ててほしいと総括した。

続いて中川当研究所所長より、我々は早い変革の波を乗り切っていかなければならない、私立学校に届く情報は限られているが、断片的な情報からでも多くのことを読みとれる教員になってほしいと述べ、閉会の挨拶とした。

<都道府県別参加者数>

No	都道府県名	参加者数	No	都道府県名	参加者数	No	都道府県名	参加者数
1	北海道	—	17	石川	—	33	岡山	—
2	青森	—	18	福井	—	34	広島	4
3	岩手	—	19	山梨	—	35	山口	—
4	宮城	—	20	長野	—	36	徳島	—
5	秋田	—	21	岐阜	—	37	香川	2
6	山形	—	22	静岡	1	38	愛媛	1
7	福島	—	23	愛知	1	39	高知	1
8	新潟	—	24	三重	1	40	福岡	10
9	茨城	—	25	滋賀	1	41	佐賀	—
10	栃木	—	26	京都	—	42	長崎	—
11	群馬	—	27	大阪	—	43	熊本	2
12	埼玉	—	28	兵庫	3	44	大分	—
13	千葉	—	29	奈良	—	45	宮崎	1
14	神奈川	—	30	和歌山	—	46	鹿児島	3
15	東京	1	31	鳥取	1	47	沖縄	—
16	富山	—	32	島根	—			
15 都府県						計		33

アンケート集計<コメントの集約>

回答率 90.9%(30名/33名)

問1. 当研修会への参加目的をお知らせ下さい。

- ・4技能の英語力育成を目指す英語教育の実践例について授業視察を通して学ぶため。
- ・CLILについて勉強するため。
- ・国が進める英語教育改革に関する情報を得て、今後の日本の英語教育の変革について知るため。
- ・指導力の向上、授業力アップ、自己研修のため。
- ・大学入試改革、新テストと英語教育改革に対応する新たな英語指導法を学ぶため。
- ・旧態依然の授業を行う体制の変革の必要性から。

問2. 当研修会の各プログラム・内容等について、参考になった点、感想、意見等をお書き下さい。

研究授業

- ・生徒が当たり前のように英語を話そうとする姿に驚いた。良い刺激を受けた。
- ・どの授業も4技能がふんだんに使われ、生徒が主体的に生き生きと活動できるように工夫されていた。
- ・英語・E語というユニークな枠組みの中で、大変アクティブな授業展開のクラスばかりで感心した。
- ・中学校の授業では先生も生徒も本当に楽しそうで、自分の意見もしっかり英語で表現していた。
- ・高校では生徒に教授させるやり方が参考になった。
- ・共通のプラットフォーム、教授陣のチームワーク、活気に感銘を受けた。

実践発表【船橋徹氏】

- ・改革の様子が詳しく聞けて良かった。
- ・改革するには「覚悟」が必要であることを思い知らされた。
- ・ここまで改革を進めるにあたり学校が一丸となって取り組んでいる様子が伝わり参考になった。

質疑応答・意見交換・助言

- ・各学校の実状が分かり良かった。
- ・自分の学校の遅れがわかった。
- ・授業実践者の話が聞けて良かった。

講演【吉田研作氏】

- ・現在の日本の英語の状況を知ることができた。
- ・4技能を習得するための授業改革に必要なヒントをたくさん得た。
- ・新テスト、学習指導要領改定、英語指導の方向性を確認することができた。

情報交換会

- ・他校の改革の歩み、現状を知ることができた。
- ・自分の学校が遅れていると考えさせられた。

ワークショップ I 【藤田保氏】

- ・評価について視点を学ぶことができた。
- ・評価基準の作成の難しさを理解した。
- ・rubrics の考え方が参考になった。
- ・「指導と評価の一体化」評価の重要さが分かった。

ワークショップ II 【逸見シャンタール氏】

- ・CLIL を知り、勉強になった。
- ・CLIL を活用したい。
- ・グループディスカッションは大変だった。
- ・少しずつ授業にいかしていけるようにしたい。

問3. 本年度秋以降の本研修会への要望等をお書き下さい。（例：研修会で取り上げてほしいテーマ、課題、実施してほしいプログラム、継続もしくは改善を望む事項、来年度以降の開催時期等）併せて、当研究所の研修事業等に対するご意見がありましたらお書き下さい。

- ・今回のような研修会を継続して行ってほしい。
- ・他の先進的実践校の実例を見せてほしい。
- ・今回のような改革途中の学校の実践授業見学は続けてほしい。
- ・国の中央研修と同質の研修を私学でも行ってほしい。

以上